

平成30年 4月10日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02253

研究課題名(和文) 近世前期出版における江戸版本文の特性研究

研究課題名(英文) The Study of the special quality about the Text of print published in Edo in the first half of the early modern times

研究代表者

母利 司朗 (MORI, Shiro)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：10174369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：御伽草子、仮名法語、往来物、という3つのジャンルの江戸版に着目し、その本文が上方版にたいしてどのような特徴をもつのかについて考察した。その結果、江戸版の本文は、元となった上方版にきわめて忠実に翻刻されていたり、時には上方版よりもよい本文になっていることの多いことがわかった。江戸版にたいする見方を根本的にあらためる必要がある。

研究成果の概要(英文)：Paying attention to what is called Edoban, especially about genre of Otogisoshi, Kanahogo, Oraimono, As a result, I understood the text of the Edoban is common to be reprinted for the upper part version which became origin very faithfully, or to have become the text better occasionally than the upper part version.

研究分野：近世文学、俳文学、往来物

キーワード：江戸版 上方版 覆刻版 往来物 仮名法語 御伽草子

### 1. 研究開始当初の背景

近世前期に江戸の本屋から出版されたいわゆる「江戸版」については、京都や大坂の本屋から出版されたいわゆる「上方版」とは異なった様式に関心が向けられ、近年多くの研究が発表されている。しかし、その「独自」性をあらためて考えてみた場合、書風においては、意外にも、当時の標準的な「御家流」「尊円流」の範囲におさまるものであったのではないかと、ということがわかってきた。江戸版の性格についての再検討がますます必要になってきていた。

### 2. 研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、近世前期の江戸における出版物にたいして従来言われてきた「独自」性が、作品の本体である本文について、はたしてどのようにあらわれているのか、いないのかを、明らかにしようとするものである。

### 3. 研究の方法

(1) 近世前期の江戸における出版物の本文について、その元版となったと思われる上方版との比較検討をする。

(2) (1)を踏まえての考察。

### 4. 研究成果

以上の、研究当初の背景、目的、方法をふまえて、本研究では次のような研究成果を得た。

江戸版の本文については、従来、杜撰である、質が悪い、というような漠然とした言い方がなされることが多かった。本研究では、その指摘が妥当であるかどうかを見極めるためにも、江戸版の本文とその元となったと思われる上方版の本文とを全文にわたって比較し、その異同の具合を確かめた。そして、異同が見つかった場合、それはどのような理由によって生じたのか、言い換えれば、その異同は、従来言われているような杜撰な翻刻態度によって生まれたものなのかどうか、といったことを逐一検討していった。

まずとりあげたのは、中世から近世前期にかけて広く読まれた御伽草子といわれるジャンルの版本である。いわゆる御伽草子の江戸版の本文を見ていくさいには、仮名草子をあつかうのとは違った注意が必要となる。江戸の本屋が御伽草子とされるある作品を出版しようとした時、そのもとになった「原稿」は、いったい何だったのか、という問題である。

近世前期に盛んに作られ読まれた多くの仮名草子には写本という形での享受の時代を考慮する必要がない。よって江戸版の仮名草子の元になったものはほとんどが上方版の版本である。一方、御伽草子の場合、江戸版のもとになった「原稿」は、多くが上方版であるとは思われるものの、写本をもとにし

た可能性も捨てがたい。以上を考慮して、多くの写本が伝わる作品、および写本は少ないものの、上方版の版本に何種類もの異なった系統のある作品、同系統においても複数の版種のある作品を、調査の対象から外した。結果的に、御伽草子としては『火おけの草子』と『小町歌あらそひ』の二点をとりあげることとした。

『火おけの草子』については、江戸版には、上方版を翻刻するさいに杜撰な作業をしたことによって不正確な本文になった所がたしかに見受けられる。たとえば、

さむき夜の風のふせぎしつゞり二つ有。  
なんによのきぬを一つにはかけざるよし、げんじ物がたりを二つかけてをきたり。(江戸版)

の傍線部は意味が不明瞭であるが、これは上方版の、

さむき夜のかぜのふせぎしつゞり二つあり。なんによのきぬを一つにはかけざるよし、げんじ物がたり、又は、らいきといふ物の本にも見得たり。されば、かのつゞりを二つかけてをきたり。

の波線部が抜け落ちたために生まれたものである。

このような杜撰な所がわずかにある一方で、江戸版の本文の方がより適切なものとなっている所もある。たとえば、上方版の

又ひきかへておもふには、いのちながきかみこそまづてんをもまふくれ。一がんのかめのほうらいにあふと聞物をとおもひて、今までながらへてこそ候へ。

は、火おけに嫉妬して火おけを打ち割った姥が、夫に打擲され、自分の胸の苦しさを訴える場面である。傍線の「かみ」は、前後の文脈からして「かめ」すなわち亀でなければならない。江戸版は、そこが「かめ」とあらたまっている。江戸版の版下筆工が、文脈を読み取って「かみ」を「かめ」に変えたか、現存はしないが、そのような詞をもつ写本がかつて存在し、江戸の本屋は、それをもとにしたかのいずれかであろう。注目すべきは、むしろ、多くの箇所において、むしろ上方版の本文より一層こなれた、スムーズな本文になっていたことである。『小町歌あらそひ』も同様である。

わずかに二作品だけではあるが、江戸版の本文は、上方版の誤りを訂正したり、訂正することはなくとも忠実な態度で翻刻したりと、想像以上に良好であることが明らかになった。

次にとりあげたのは、当時の出版目録の分類で「和書」「仮名」、あるいは「法語」などと呼ばれた「仮名法語」と称されるものである。「仮名」と称されるものの、漢文体ではないというだけで、本文にはかなり多くの漢字・漢語が使われている。上方版におけるこれらの漢字表記が江戸版ではどのように処理されていたか、という点では、御伽草子の

場合との相違を考えてみることもできる。作品としては、『夢遊集』と『法灯国師法語』を取り上げることとした。

『夢遊集』の場合、結果的には間違った本文となってしまった所もあるが、版下を書いた筆工が、意味を吟味して書き写していったため、逆に上方版より良い文章となった所もある。江戸版版下の筆工は、上方版を可能な限り忠実に写していったが、上方版を手直した方がより良い文書になると考えた時は、臨機応変に改変を加えていったようである。不注意によるミスや、理由のわからない悪い方向への書き換えも少なからず認められるが、『夢遊集』全体としては、けっして質の悪い文章にはなっていないかった。

『法灯国師法語』についても、全体として見れば、致命的な誤りは少なく、時には上方版の誤りを訂正しつつ、ほぼ忠実に上方版を翻刻していった様子が見える。これらは筆工の教養に基づいた改変・訂正と思われ、その典型的な例としては、「尽米来際」(第五)という上方版の誤り(正保二年版も同じ誤り)が、江戸版で「尽未来際」と、正しい形に改めた例がある。

また、漢字と仮名の関係については、上方版の漢字を江戸版で仮名に置き換えやすいという傾向は認められなかった。

最後にとりあげたのは、御伽草子や仮名法語の場合のような、上方版を「原稿」としての「翻刻」による出版と異なり、「覆刻」による出版を考慮することのできる往来物である。作品としては『都名所往来』をとりあげる。

往来物版本の多くは、その本文の内容が学ばれると同時に、筆をもつ手習い子の手本としての役割をももっていた。よって、往来物に関しては、江戸の本屋が上方版を「原稿」としてそれを出版しようとするさい、すでに手習い手本としての役割を十分に果たしていた原稿を、新規に書き換える必要はまったくなかった。江戸の本屋が、往来物については上方版を翻刻ではなく覆刻により出版したのはこの理由による。ところが、かつて『人倫名尽』という往来物について、やはり同様に上方版と江戸版を比較してみたときに感じたのは、覆刻という、本来はその元となった版(上方版)と酷似するはずの出版技法によって作られた江戸版が、なぜ一目見て、やはり江戸版風の雰囲気をもっているのか、ということである。『都名所往来』についても同様の印象がある。上方版と江戸版を横に並べて紙をめくり比べていっても、実は目に立つような違いがすぐに見つかるわけではない。むしろ、江戸版の、忠実で正確な覆刻技法に感嘆する程度である。しかし、文字の画一画の書き方を子細に比べていけば、そこには、微妙だが、明らかに区別できる異なりを見つけることができる。上方版を元にして透き写しをしていく時においてさえ、江戸の

筆工の書き癖の出現する所が少なくなかった、ということなのであろう。

(まとめ)

御伽草子、仮名法語、往来物というジャンルの出版物について、ごくわずかであるが具体的に作品をとりあげ、その江戸版としての特徴を、本文の面から考察した。

前二者についてはあわせて四作品をとりあげたが、結果的にはいずれも予想以上にその本文が良好であることが明らかになった。上方版の意味の通りにくい所は書き改め、あるいは、筆工の言語感覚にしたがった改変のあとさえ認められる。むしろ、目移りを理由としたと思われる脱文や、他のケアレミスもないわけではないが、全体として杜撰な本文というほどのものではない。

往来物はわずかに一点だけであるが、筆者が今までにあつてきた作品と合わせて、忠実な覆刻をおこないつつも、そこに筆工の書き癖による江戸版らしい書風がおのずから現出していることも確認できた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3 件)

母利司朗、江戸版御伽草子の本文 近世前期における江戸本文の特性(1)、和漢語文研究、査読無、13号、2015年、264-276頁

母利司朗、江戸版仮名法語の本文 近世前期における江戸本文の特性(2)、京都府立大学学術報告(人文)査読無、68号、2016年、27-37頁

母利司朗、江戸版往来物の本文 近世前期江戸本文の特性(3)、京都府立大学学術報告(人文)査読無、69号、2017年、1-10頁

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

母利 司朗 (MORI, Shiro)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：10174369

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )